

## メキシコ農業の地域性

宮井 隆

はじめに

メキシコ農業の地域性

革命後の農地改革を経たメキシコの農業部門は、一九四〇年代に入って一時期人口増加率をしのぐほどその生産力を増大させ、それがラテン・アメリカではブラジルと並んで奇跡といわれる経済成長を支えてきたといえる。しかし農業生産力増大の結果、メキシコ農業は新たな問題に直面している。すでに一九六〇年代半ばから農業部門の増加率は鈍化しはじめるが、それは農地拡大の頭打ち、公共投資の工業部門への転化、生産の不安定性、輸作物市況の変化、急速な人口増加などが直接的原因であるけれども、総じていえば増大した生産力に対応できない生産関係の矛盾が表面化したといえよう。つまり革命によってかつてのアシエンダが崩壊したにもかかわらず、新たにネオラティフンディオとミニフンディオの二面性、土地・資本を集中した近代的経営体と伝統的技術

を用いている零細経営および大量の土地なき農村プロレタリアートの二重構造が出現し、農業生産を制約すると共に農村の貧困化を深刻にしているのである。

経済の二重構造は地域に投影される。先進資本主義国特にわが国の経済は、その成長過程でかつて地域間格差が喧伝されたが、少なくとも所得統計でみる限り格差は相対的に縮少傾向を示している。しかし低開発国では、資本主義経済の発展にともなう産業間、都市・農村間のみならず農業自身の格差が拡大する。地域が不均等に発展することについては、理論として実証にたえうるだけ深化していないが、実態として農業の二重構造、分極化 *polarization* は、先進農業地域と後進農業地域となつて表われている。

本稿はこのような分極化を生じているメキシコ農業をとりあげ、主として一九七〇年センサスから地域的狀況を把握することに努め、メキシコ農業の地域構造と地域のかかえる矛盾に接近してみたい。

## 一 農業様式

自給的農業を基本とするメキシコ農業は、アメリカ合衆国にみられるような農業地帯構成がみられない。つまり作物に特化したかなり均質な広がりをもせる同質地域は、たとえ自然条件が同一であったとしても歴史的條件の異つたメキシコでは発達しなかった。したがって作物を指標にした分布図を作成しても、全国的に栽培されているとうもろこしを除いて局地的な地域区分にならざるをえない。そこで統計分析に入る前に、作物や耕種形態よりは農業経営を總体的にとらえた農業様式についてこれまでの管見をまとめておきたい。

従来から農業様式を概括的にとらえて伝統的農業と近代的農業の区分が行われてきた<sup>1)</sup>。投入を考えるならば、

伝統的農業は人力・家畜を使って自給生産を主体とするのに対し、近代的農業は機械・肥料・農薬・改良種そして灌漑施設を使用するといえよう。このような点から前者を自給的農業、後者を商業的農業ともいう。<sup>2)</sup>しかしこれらは明確な定義によって判然と分けられるものではなく、A. Bonilla Sánchezなどは、低開発国では生存農業 *subsistencia* の商業性 *mercantil* と生存農業の自給性 *autoconsumo* を区別せねばならず、前者は国際市場のメカニズムに従っているとしている<sup>3)</sup>。彼はメキシコの中央部と北部のリュセツランを例としてあげているだけであるが、ユカタン州のエネケン生産やベラクルス州、チャパス州のコーヒー生産も自給農業を基本としながら国際市場に直結している例になろう。

市場性だけでなく農業所得・技術水準を考慮して、メキシコ銀行農業計画研究グループが分類したのが一般化している。<sup>4)</sup> すなわち近代農業 *moderna*、伝統農業 *tradicional*、自給農業 *de subsistencia* で、経営体の割合でいえばそれぞれ7%、40%、53%となっている。<sup>5)</sup> また R. F. Fernández は土地の集約度から経済的限界農業 *submarginal*、収益可能農業 *reduable*、超集約農業 *sobre intensiva* (Nylon) の三分を新しく提案している。<sup>6)</sup> しかしメキシコ銀行の区分と結果的には差異はみられない。この他農民階層区分も農業様式のタイポロジーと結びつけて考えられる。<sup>7)</sup> 後述するように貧農以下の階層は、自給的農業地域に多い。経済的、社会的な限界的農民の排出は、大都市への人口流出とスラム形成の根源となっている。<sup>8)</sup>

こうしてメキシコ農業を取扱ったものには、農業の二面性または生存限界農民に触れないものはないが、農業様式との関連でいえば全国的レベルで扱われており、その分布状況または地域的狀況が把握しにくい。また研究の成果だけが示されそのプロセスが分らないことも難点である。例えば E. Welhausen は近代農業地域、伝統的農業地域の分布図を作成しているが、これでも概念的で空白部が多く、使用された資料も示されていない。<sup>9)</sup> も

とも先進国と比べて利用できる統計が少ないのが原因であるが、農業タイポロジーをとりあげても地域的分析については個々の研究者の恣意にまかされる部分が多いように思われる。そこで以上の農業様式をふまえてできるだけこれまでの資料を整合させながら、メキシコ農業の地域性を明らかにしてみよう。

## 二 土地利用<sup>10)</sup>

一九七〇年センサスの対象となった農場総面積は、1,300万haでこれは国土面積の71%になるが、うち可耕地は2313万haで農業総面積の16・5%である(表1)。センサスはしだいに基準を変えて詳細になってきているが、一九六〇年センサスでは、対象面積16,908万haの14・1%、2,380万haが可耕地であった。耕地の絶対数で67万haが減少しているが、七〇年センサスの方がより実態に近いと考えた方がよからう。それにしてもはじめにのべたように一九四〇年来拡大してきた耕地が一つの限界に近づいたといえる<sup>11)</sup>。一九六〇年センサスは統計地域区分に従って各州をまとめているので、以下の地域区分にもそれを踏襲した(図1)。

メキシコの国土の80%以上は乾燥または半乾燥地帯、13%が湿潤地帯、2%が過度湿潤地帯に区分される一方国土の36%が勾配10度以下の平地で、29%が25度以上の山地に区分されている<sup>12)</sup>。このような複雑な自然条件を反映して耕地率をみると、半乾燥に属する中央高原をかかえる中央地域および降水量の多いメキシコ湾岸地域に高く、北部、北部太平洋岸地域の乾燥地帯で低くなっている。人口密度の高い中央地域は全国耕地の28%が集っている。しかし、耕地がすべて毎年利用されるわけではない。耕地面積の土地区分をみると80%が天水地で、灌漑地は15%、湿地が4・3%である。このように天水地が多いことは必然的に農業生産の不安定をもたらす。

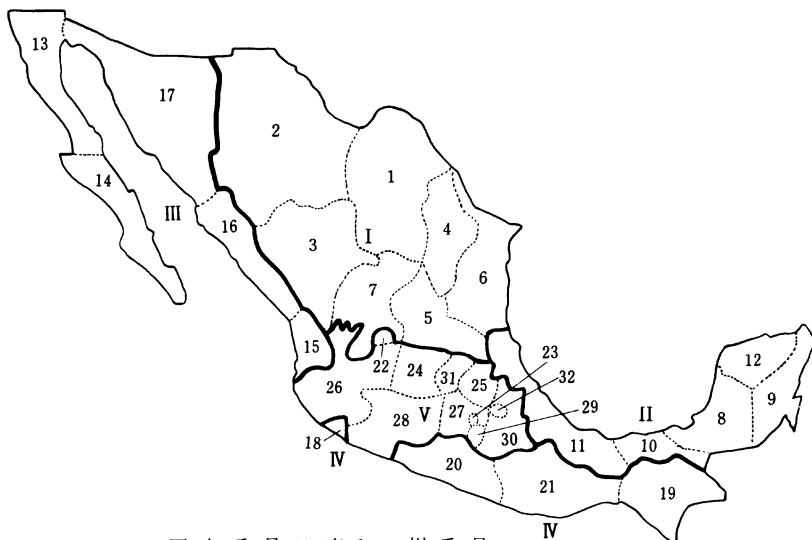
メキシコ農業の地域性

表1 土地利用状況

各 州	総面積 千ha	耕地%	牧地%	林地%	灌漑地%	作付地 %
全 国	139,868	16.5	42.5	14.1	15.4	59.7
I 北 部 地 域	65,394	8.1	66.9	10.9	19.0	68.7
1. Coahuila	13,264	3.5	71.3	3.0	42.5	51.7
2. Chihuahua	21,263	5.0	75.1	11.1	17.3	69.8
3. Durango	8,396	8.5	69.3	13.8	14.9	72.5
4. Nuevo Leon	4,637	6.9	65.1	14.5	25.1	68.3
5. San Luis potosi	4,844	14.6	53.9	10.3	5.2	55.3
6. Tamaulipas	6,486	16.5	46.7	25.4	32.9	78.3
7. Zacatecas	6,504	15.0	59.1	6.2	5.5	71.9
II メキシコ湾岸地域	15,228	31.5	15.0	32.4	1.3	32.7
8. Campeche	3,168	8.2	10.5	52.7	0.7	27.9
9. Quintana Roo	2,037	2.5	3.0	88.6	—	68.7
10. Tabasco	1,847	55.2	16.8	7.8	0.2	14.2
11. Veracruz	5,232	54.8	21.7	10.3	1.9	41.9
12. Yucatán	2,944	20.5	15.2	26.3	0.8	18.9
III 北部太平洋岸地域	24,279	10.9	63.9	9.1	49.8	75.9
13. Baja California	2,731	11.8	41.5	7.5	55.1	68.2
14. B. California T.	2,505	2.5	67.9	5.6	75.0	56.8
15. Nayarit	2,507	17.0	46.1	22.3	8.6	61.1
16. Sinaloa	3,692	27.7	37.7	14.8	41.6	76.5
17. Sonora	12,844	6.3	79.1	5.9	77.8	87.4
IV 南部太平洋岸地域	14,888	26.0	28.3	20.0	3.7	43.7
18. Colima	464	38.5	31.2	15.7	22.9	40.2
19. Chiapas	4,763	37.8	25.2	20.3	1.1	31.9
20. Guerrero	4,320	20.4	31.5	13.8	2.9	49.2
21. Oaxaca	5,341	19.0	28.4	25.1	5.6	60.6
V 中 央 地 域	19,980	32.2	43.1	12.5	15.7	75.5
22. Aguascalientes	503	27.2	67.1	0.7	23.3	68.5
23. Distrito Federal	93	26.8	6.4	41.9	4.0	77.1
24. Guanajuato	2,585	42.3	42.3	3.7	21.8	88.4
25. Hidalgo	1,305	44.9	29.2	10.4	11.4	64.2
26. Jalisco	6,099	23.6	55.2	13.6	8.1	65.4
27. México	1,417	45.3	25.2	17.1	16.8	73.6
28. Michoacán	4,066	26.0	40.6	19.0	26.0	76.6
29. Morelos	390	31.7	32.5	9.4	29.0	76.3
30. Puebla	2,416	36.9	33.1	11.0	11.0	81.5
31. Querétaro	821	25.4	55.5	6.9	15.7	76.5
32. Tlaxcala	366	64.2	10.9	7.1	2.9	84.8

注 灌漑地、作付地はそれぞれ耕地にしめる割合である。

図1 統計地域区分

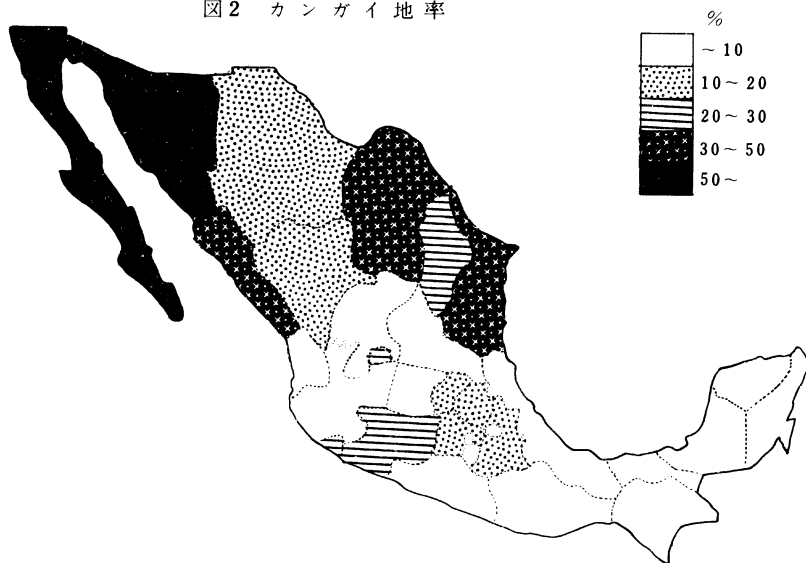


図中番号は表1の州番号

一九六八年冬季から六九年夏季までに作付された単年作物の面積1,382万haのうち収穫面積が1,059万haで、23%の320万haが旱魃、洪水、病害、雹の自然災害で失われている。中央高地では七月から十月が雨期であるが降水量は不規則である。雹害もこの地域で起る。したがって灌漑地は相対的に安定した生産をもたらすので、耕地にしめる灌漑地割合の分布をみると(図2)、灌漑地率では乾燥地帯の北部太平洋岸地域が50%で最も高く、メキシコ湾岸地域、南部太平洋岸地域はほとんどみられない。熱帯地帯は天水地の外湿地が多くなる。耕地にしめる作付地割合でもこの地域が低い(表1)。

一九四〇年来、政府は積極的に灌漑施設の新設、拡充に力を入れ、北部太平洋岸地域、北部地域および中央地域に大規模なダムを設置してきた。しかし一九六〇年の灌漑地は340万haであり、七〇年と比べるとこの一〇年間の灌漑地拡大に対する公共投資は進まなかった。ただ灌漑地だからといって100%利用されるわけではなく、乾燥地帯ほど降雨量は不安定であり、水資源への依存性は

図2 カンガイ地率



それだけ強まることはいうまでもない。一九六〇年では灌漑地の71%が実際に利用された。<sup>13)</sup>一九七〇年では作物によって灌漑地依存率は異なるけれども(とうもろこしの16・7%、小麦の77・1%が収穫面積にしめる灌漑地割合)、単年作物については灌漑地の69%が収穫面積であった。ついで作物別に耕地の利用状況をとりあげよう。わが国の米作に匹敵する基本的作物であるとうもろこしは、一九六八年までに耕地の半分近くを利用しほとんど天水地に植付けられた。収穫面積は間作を入れて800万ha、約800万トン生産された。中央地域で生産の44%をしめ、なかんずくバヒオ地方をかかえるグアナファト、ハリスコ、ミチョアカン三州で全国の26%が生産されている。ついで小麦はユカタン半島を除いて全国的に栽培され、収穫面積86万ha、200万トン生産された。小麦は冬作が中心で北部の灌漑地に多く、北部太平洋岸地域のソノラ、シナロア、バハ・カリフォルニア三州(以下州は省略)だけで63%が生産されている。かつてはバヒオ地方が小麦生産の中心であった。収穫面積で続いているのはイン

ゲン豆で、全国的作物であり72万ha、間作の生産を含めると80万トンであった。スペイン征服後、小麦と家畜生産はインディオの食糧体系を変えてきたけれども、基本的にとうもろこしと豆の農耕複合形態は失われていない。この外収穫面積で大きいのは綿花54万ha、さとうきび36万haの商品作物、以下米、ソルガム、ゴマ、飼料用大麦、エジプト豆、アルファルファ、ベにばなど10万ha以上で続いている。輸出作物として著名なコーヒー、野菜、熱帯果実などは地域的に専門化している。

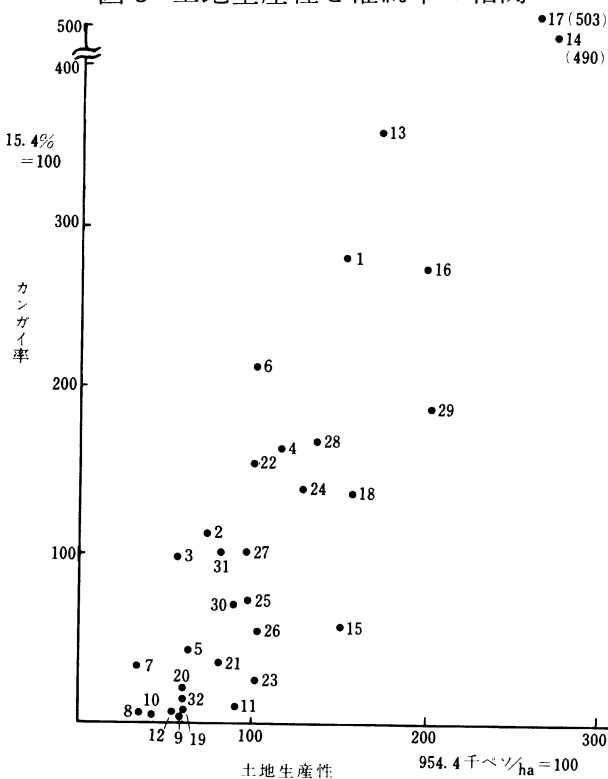
土地利用から地域分類を試みるならば、耕地率、灌漑率の全国平均をとってそれぞれの高低からつぎの四つのパターンが区分できる。

- ① 耕地率高く灌漑率高い。
- ② 耕地率低く灌漑率高い。
- ③ 耕地率高く天多地多い。
- ④ 耕地率低く天多地多い。

① パターンは州番号で6、16、18、22、24、27、28、29、31 ② パターンは1、2、4、13、14、17 ③ パターンは10、11、12、15、19、20、21、23、25、26、30、32 ④ パターンは3、5、7、8、9がそれぞれ属する。耕地率や灌漑率は自然条件を反映しているので、これが直ちに先の農業様式と結びつくわけではないが、後に見るように近代的先進農業が行われている北部地域、北部太平洋岸地域での南北の差、また伝統的後進農業が行われている中央地域での東西の差といった生産基盤の差が認められるのである。



図3 土地生産性と灌漑率の相関



### 三 土地生産性

一九六九年の牧畜生産を除いた農業生産評価額は2,208,389万ペソ、売却額1,919,520万ペソであった。

耕地面積と作付面積は一致しないが、樹木作物などの永年作もあるので単純に耕地面積で割ると、全国平均は954.4ペソ/haになる。各州別にみると耕地率との相関性はみられないが、灌漑率との相関性が高い(図3)。特に北部太平洋岸地域の土地生産性の高いのが著しい。北部地域は低いけれども、先の地域パターンでのべた様に、北部地域でも灌漑率の低い南部が全体の平均値をさげているのである(表2)。この点で天水地の多いメキシコ農業では、灌漑施設が

表2 農 業 生 産 性

	農業生産額	土地生産性	資本生産性	労働生産性
	百万ペソ	千ペソ	千ペソ	千ペソ
全 国	22,083.8	954.4	1.4	4.4
北 部 地 域	3,976.0	744.4	0.8	4.4
メキシコ湾岸地域	3,333.5	693.2	2.8	4.1
北部太平洋岸地域	5,331.5	2,009.9	1.1	12.4
南部太平洋岸地域	2,640.5	680.4	2.5	2.7
中 央 地 域	6,801.7	1,054.1	1.5	3.3

農業生産を高めるための決定要因といえよう。このことは作物別に土地生産力を比較するとより明らかになる。ほとんどの作物についてha当り収量は天水地より灌漑地が高い。とうもろこしの場合で見ると、通常種の天水地平均866kgに対し灌漑地平均1,547kgで約2倍に近い。ただこれは平均値であって天水地でも最高値はハリスコの1,615kg、灌漑地の最低値はゲレロの880kgといった偏差はある。とうもろこし改良種では天水地平均1,574kg、灌漑地平均2,671kgであり、最高値はメキシコの4,927kgである。小麦の場合は灌漑地依存が更に高く、天水地平均854kgに対し灌漑地平均2,357kgになり、約3倍に近い。緑の革命の促進者であったE.J. Welhausenが、一九五〇年から七〇年にかけて小麦のha当り生産が750kgから3,200kg、とうもろこしが700kgから1,300kgに増加したこと、およびそれには技術的要因の成果があったことをあげているが、生産力の拡大は品種改良と灌漑地にしぼられる。<sup>14)</sup>メキシコ農業の将来性は、生産力増大という側面で見れば、技術的には灌漑可能地を今後どれ位拡張できるかということと投下資本量の可能性にゆだねられると思われるが、前者については推計値も異なり確実性は乏しいといわねばならない。<sup>15)</sup>

土地・家畜を除いた固定資本当り生産性をみると、土地生産性および灌漑率との相関性よりも耕地率の高い所で資本生産性は高くなっている。すなわち固定資本1,565,750万ドルを農業生産額で割った全国平均は1,400ペソであるが

州別ではオアハカの5500ペソを筆頭に先の地域パターン③の州がほとんど全国平均を上廻る。それ以外はソノラ、ミチョアカン、モレロが3000ペソをこえるだけである。湯川摂子は近代農業における高い土地生産性は、大量の資本を投じて達成されたため、近代農業部門の資本生産性が伝統農業よりも低くなるとみる。<sup>16)</sup>熱帯農業の行われているメキシコ湾岸地域や南部太平洋岸地域は、資本装備が遅れているのであるが、資本投入が直ちに効率の向上と結びつかないことは、資本だけでなく労働力に強く依存する低開発農業一般のもつ特性からきているといえよう。

#### 四 労働生産性

一九七〇年人口センサスでは、12歳以上の経済活動人口1295.5万人のうち39.4%の510万人が農業人口である(表3)。全国農業人口の4割が中央地域に集中しているが、農業人口比が多いのは概して村落人口の多い南部太平洋岸地域および中央地域から北部地域の南部にかけての所である(図4)。

農牧エヒドセンサスで実際の農場労働力をみると、一九七〇年一月末では生産者とその家族が530.2万人、臨時雇用労働者20.1万人、定住労働者43.3万人合計783.6万人であり、収穫時の労働者は一九六八年から六九年冬季で605.3万人、一九六九年夏季で966.8万人を要している。メキシコ農業人口の問題点の一つは、土地に対する権利をもたない農民―土地なき農民―が大量に農村に滞留し、季節的労働者として国内また合衆国にまで移動していることであるが、この土地なき農民を数量的におさえることは難かしい。単純に臨時雇用労働者210万人をそれに比定できるが、土地に対する権利をもちながら雇用者になる者もいるのである。

表3 労働力

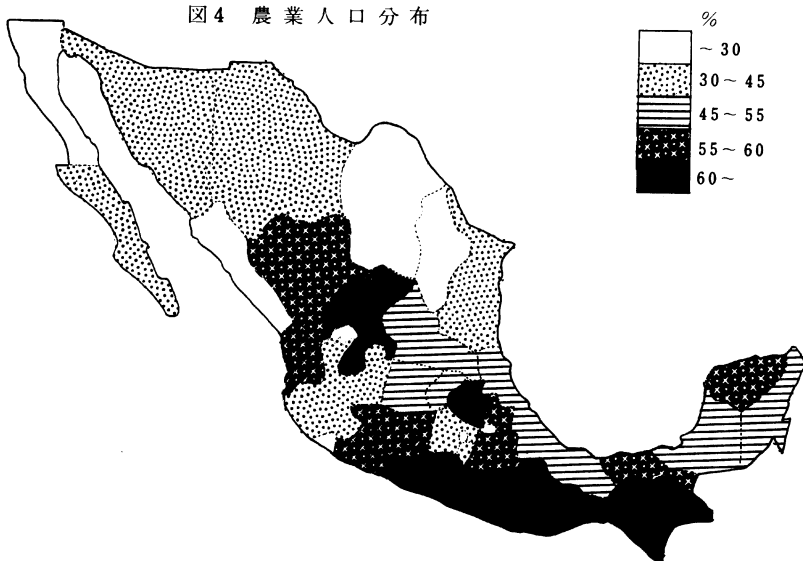
	a 総人口	b 産業人口	a/b %	c 農業人口	b/c %
全 国	48,225,238	12,955,059	26.8	5,103,519	39.4
北 部 地 域	9,051,694	2,348,902	25.9	886,386	37.7
メキシコ湾岸地域	5,681,810	1,495,048	26.3	804,182	53.8
北部太平洋岸地域	3,907,701	1,034,771	26.5	435,988	42.1
南部太平洋岸地域	5,422,990	1,375,529	25.4	934,341	67.9
中 央 地 域	24,161,025	6,700,807	27.7	2,042,620	30.5

R. Stavenhagenが一九四〇年から六〇年までの推定を行っている<sup>17)</sup>ので、統計は整合しないが（一九六〇年は八歳以上を労働力人口に数え、コムネロを零細土地所有者に入れていた）、以前と比較する意味で作成したのが表4である。セリナスでは土地所有のタイプによって土地所有者93・1万人、借地農2・7万人、刈分農2・5万人、占有農2万人、入植者1・4万人、その他2・3万人合計125万人を数えている。なおこれは後にみる個人部門の農場数99・7万とは一致しない。エヒダタリオとコムネロを合せると228万人である。これらと農業人口との差160万人を土地なき農民と考えた。一九六〇年と比べて減少しているが、統計基準の違いで農業人口自体が100万人減少している。したがって一応の目安にすぎないが、メキシコ農業人口の4割近くが土地なき農民と考えられる。土地なき農民は地域的に北部太平洋岸、南部太平洋岸地域に多く、特にババ・カリフォルニアとコリマは農業人口の7割近くになる。

労働生産性はどうであろうか。この場合先の農場労働力をとらなければならぬが、従来の研究では経済活動人口を使っているので農業人口でみた。

北部太平洋岸地域は全国平均の約3倍で、なかでもソノラが18500ペソで最も高く、南部太平洋岸地域のゲレロ、オアハカが2100ペソで最も低い。コリマは3200ペソで北部太平洋岸地域と等質である。北部地域でも南北の差、中央地域でも東西の差があるので土地生産性との相関をみたのが図5である。そ

図4 農業人口分布



それぞれの指数150以上を先進農業地域とすると、北部太平洋岸地域の各州とコアウィラ、コリマがこれにあたり、ナヤリトを除いて灌漑率も高い。タマウリパスは土地生産性が僅かに100を越えるがここに含まれよう。あとは後進農業地域と考えられるがその中でも指数80以下の低開発農業地域は、ベラクルスを除くメキシコ湾岸地域と北部地域の南部三州ドウランゴ、サン・ルイス・ポトシ、サカテカスおよびゲレロ、トラスカラがあげられる。オアハカも土地生産性が僅かに80を越えているだけなのでここに含まれよう。これらはほとんど灌漑率も低い。しかし低開発農業地域といえども自給農業だけを行っているのではなく、ユカタンのエネケン、カンペチエ、タバスコのさとうきび、米、ドウランゴの綿花、小麦、トマト、サン・ルイス・ポトシのさとうきび、コーヒー、ゲレロ、オアハカのさとうきび、米、綿花、小麦、コーヒーといったそれぞれの自然条件を利用した商品生産も行っているのである。

労働生産性と土地生産性は本来的に相関性は少なく、

表4 農業人口推移 単位 1,000 人

	1940		1950		1960		1970	
		%		%		%		%
農 業 人 口	3,831	100	4,824	100	6,143	100	5,131	100
土地なき農民	1,389	36	2,079	43	3,273	53	1,906	37
エヒダタリオ	1,223	32	1,380	29	1,524	25	2,182	43
土地所有者	1,219	32	1,365	28	1,346	22	1,042	20

事実一九七〇年以前のセンサスではかなり分散している。それにもかかわらず相关性が高く表われているのは、村落居住人口の少ないメキシコ北部乾燥地域に灌漑農業が発達した結果であり、灌漑がメキシコ農業地域を条件づけていることを物語る。

M. L. Guzman Ferrer は、一九四〇年から一九七〇年における各州の農業生産の推移から、類似の研究では数少ない地域分析を行っている<sup>18)</sup>。一九七〇年は推計値を使っているが、労働生産性、土地生産性、資本生産性、収穫面積率、灌漑率、農業資本、公共投資、民間投資、機械化、投下肥料率、最低賃金の11の指標から州別に10年毎の変化率を求め、地域的不均衡性からつぎのような区分を行った。

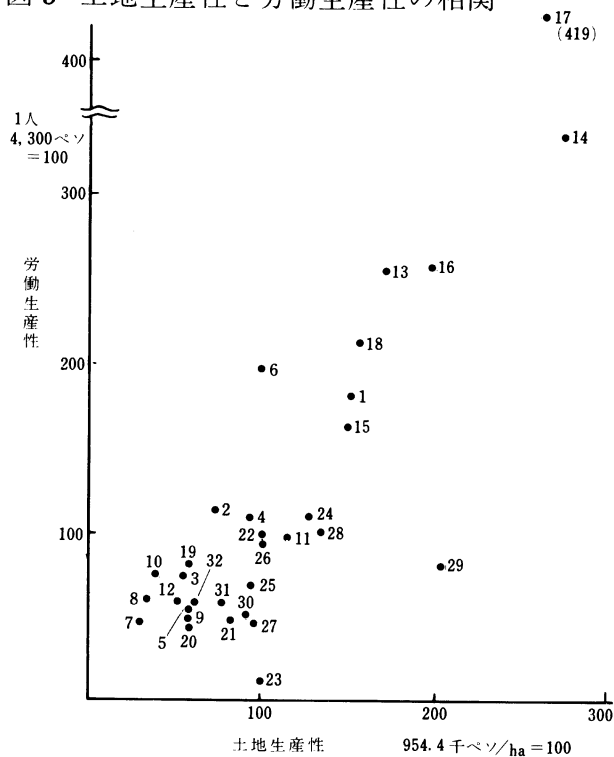
- ①急速に発展した州—1、13、16、17
- ②漸進的に発展している州—5、6、10、14、18、28、29、30
- ③安定している州—4、15、27
- ④上下変動のある州—7、9、11、22、24、26、30
- ⑤下降している州—2、3、8、12、25、32
- ⑥低開発状態の州—19、20、21

(番号は州番号 23の連邦地区は除外している)。

これで見ると灌漑率でみたほど目立たないけれども、ナヤリトを除く北部太平洋岸地域の先進性とコリマを除く南部太平洋岸地域の後進性が浮彫されている。

これまで触れてきたのは、土地利用の枠組の中で地域的差異を見てきたのであ

図5 土地生産性と労働生産性の相関



て、メキシコ農業のもつ地域矛盾にせまるには、土地制度を抜きにしてあり得ない。つぎにこれを取りあげてみよう。

## 五 エヒド部門

従来から農牧エヒドセンサスでは、メキシコ特有の土地制度に従って土地所有別に個人部門とエヒド部門を区別してきた。個人部門は経営の大小を示すために便宜的に5 ha以上とそれ以下の農場に分けられてきた。エヒドは実態的に

ミニフンディオと同じであろうが、法的には私的所有と違っているし、センサスでは区別していないが個人的エヒドと集団的エヒドがある。<sup>19)</sup>一九七〇年センサスではこのエヒド部門に、以前は5 ha以下の農場に含めていた伝統的インディオ共同体を、農業共同体（以下共同体と略す）として同一に扱っている。したがって以前と比較するためにはエヒドだけとりあげなくてはならないが、共同体は量的には少ない。すなわちエヒド部門22,681の

経営体のうち、エヒド 21,475、共同体 1,206 (5%)、エヒドの成員エヒダタリオと共同体の成員コムネロを合せて 2,182,486 のうちエヒダタリオ 1,985,774、コムネロ 196,712 (9%) である。但し州別に特に注意されるのはオアハカであり、エヒド部門の 33・2% が共同体、成員の 46・7% がコムネロである。その他コムネロが 20% に近いのは、ゲレロ 19・9%、連邦地区 19・6%、ナヤリト 19・4%、そしてミチョアカン 13・4%、ソノラ 12・0% あとはすべて 9% 以下である。このような状況から、以下エヒドと共同体を合せたものをエヒド部門としてこれを軸に農地構造の地域性を明らかにしてみよう。

エヒド部門の面積は、農場面積、耕地面積、灌漑地面積でそれぞれ全国平均 49・8%、55・1%、49・1% である (表 5)。土地利用上の約半分がエヒド部門、つまり共同の保有地でしめられている。一九六〇年はそれぞれ 26・3%、43・4%、41・6% であつたから、たとえ統計上の不整合を考慮したとしても、農場面積にしめる割合の急増が目立っている。共同体が付加された南部太平洋地域はともかく、バハ・カリフォルニア、シナロハ、キンタナルでは純粋にエヒドが増加している (図 6)。しかしエヒド部門は個人部門と比べて林地や非生産地が多く、実際に生産に利用される耕地でみると多少様相は変る (図 7)。更に生産力の高い灌漑地では、北部地域や北部太平洋地域で個人部門の比率が高くなるのである (表 5)。

一九六〇年の統計については、すでに若干考察したが、共同体を除くエヒド経営体が一九六〇年 18,609 であつたから、経営体そのものの増加はそれほど著しくはない。経営体で増加した地域は、北部地域と北部太平洋岸地域である。耕地比率では中央地域のアグアスカリエンテス、グアナファト、トラスカラで減少した。これらの州では個人部門が増大したということではなく、耕地面積自体も減少している。中央地域は 5 ha 以下の農場が多いところで、零細経営がエヒド部門と補完関係にあることは以前の傾向と同じである。エヒド部門がミニフンデ



表5 土地所有状況

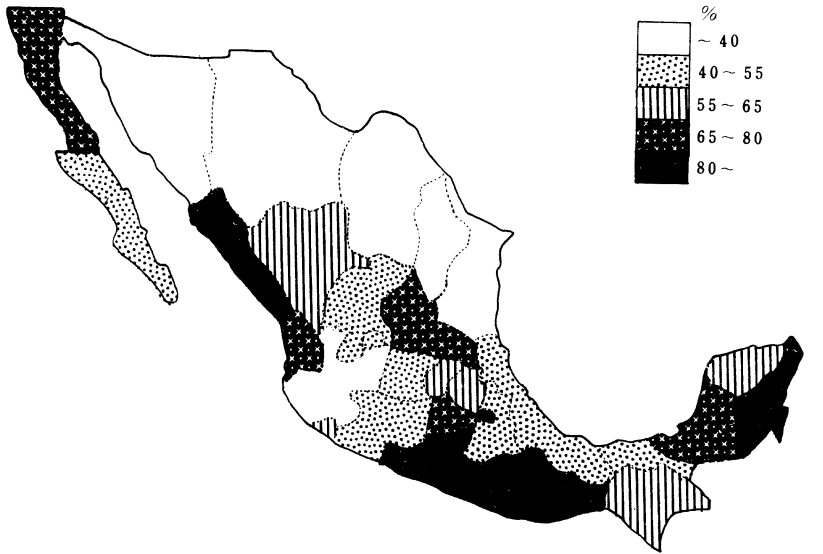
	農場面積 千 ha		耕地面積 千 ha		灌漑面積 千 ha	
	私有地	エヒド (%)	私有地	エヒド (%)	私有地	エヒド (%)
全 国	70,144.0	69,724.1 (49.8)	10,385.5	12,752.8 (55.1)	1,822.7	1,760.2 (49.1)
北部地域	38,471.9	26,925.0 (41.1)	2,615.8	2,724.4 (51.0)	574.2	446.0 (43.7)
メキシコ湾岸地域	5,805.9	9,424.1 (61.8)	2,440.5	2,368.5 (49.0)	26.7	40.9 (60.5)
北部太平洋地域	13,072.2	11,209.8 (46.1)	1,128.0	1,524.4 (57.4)	753.7	571.1 (43.1)
南部太平洋地域	3,529.4	11,360.8 (76.3)	1,473.7	2,407.1 (62.0)	60.2	85.3 (58.6)
中央地域	9,263.2	10,802.8 (54.0)	2,725.5	3,726.6 (57.7)	406.6	615.6 (60.2)

イオ化しているというのは、すべてのエヒドが個人エヒドであると考えた場合、エヒダタリオ当りの耕地が5・6 ha、コムネロ当り4・7 haという規模からもいえる。この場合も中央地域は4・1 haで小さくなっている。もっとも5 ha以下の農場をみると、経営体当りの耕地は1・4 haと更に小さい。

大経営との差は代表的な生産物で比較すると、とうもろこし・在来種の生産量437万トンのうち66・7%の280万トンがエヒド部門で生産されたのに対し、小麦でみると177万トンの生産のうち67・2%の119万トンが5 ha以上の農場で生産されていることからうかがえる。エヒド部門の自給的性格を示すものといえよう。ただ5 ha以上の農場がすべて商業的農業であるといえないことは、規模別に区分された統計上の制約で当然のことであろう。

農業生産額ではエヒド部門の生産が多い。280億ペソの生産のうち51・2%の118億ペソがエヒド部門で生産され、5 ha以上の農場では98億ペソの44・6%である(表6)。地域的にはメキシコ湾岸地域と南部太平洋地域に高く、中央地域は5 ha以下の農場部門が他の地域より比率は高くなる(図8)。エヒドの低生産性は以前から指摘されていることであるが、エヒダタリオとコムネロあたりにすると5100ペソになるのに対し5 ha以上の農場の経営体あたりでは24,400ペソになる。5 ha以下の農場あたりでは1,400ペソである。エヒド部門で5 ha以上の農場に近い生産をあげているのは、バハ・カリフォルニア

図6 農場面積に占めるエヒド部門比

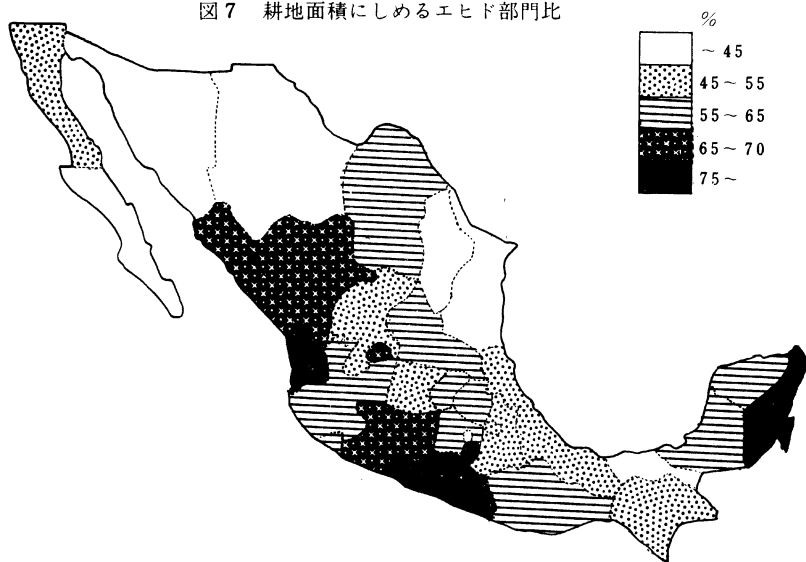


25,300ヘクタール、コロイム14,400ヘクタール、ソノラ12,500ヘクタール、シナロア12,200ヘクタール、ナヤリト11,600ヘクタール、その他タマウリパス、ベラクルス、グアナフアト、ハリスコと続き、商業的農業の盛んなところになっている。

エヒド制度の欠陥についても、多くの人が指適していることであるが R. Slavenhagen を引用すればつぎの様にのべている。

「農地改革の政策は、個人所有を廃止する考えはなかった。経済的安全弁と政策の不満からの逃げ道としての集団的所有の上に小農民経済を発展させることにあった。その結果エヒドは政治闘争の道具となった。多くのアセンドラードは個人所有のシステムと企業の自由を破壊するためのコムニスタの意図としてエヒドを考えた。社会主義者は農地改革の基本的防波堤をエヒドに求めた。他の八は、個人的農業発展にとってエヒドが封建的タイプを制限する役割をになったとみた。こうしてエヒドはこの五〇年間に政府の政策の流れを映し出した<sup>21)</sup>。そして一九六六年の農村研究からミチョアカンの綿作エヒドでは

図7 耕地面積に占めるエヒド部門比



エヒダタリオの55%が灌漑地を農業企業に貸し、バヒオ地方では、8%から30%が土地の賃貸を行い、ヤキでは、エヒダタリオの1/4が土地の権利を譲渡していたことを引例している<sup>22)</sup>。実態とのズレは個別研究によって補強されなければならないけれども、これまでセンサスでみてきた限りでは、エヒド部門はメキシコ農業の半分をしめているのであり、エヒドが実態としてミニフンディオ化しているとしてもイコールではないのである。むしろ土地なき農民や零細農と比べて、エヒダタリオの権利をもつことは、最底の生活手段が保障されていることになる。だからこそ権利を売買したり、権利を保持したまま賃金労働者になる。そこにまたネオ・ラティフンディオが発達してくる間隙があるといえるだろう。このような制度と実態とのズレは先進地域ほど際立つのではないだろうか。以下では農家階層を例にとりあげてみよう。

表 6 所有別農業生産額 単位 100 万ペソ

	合 計	5 ha 以上の農場(%)	5ha 以下の農場(%)	エヒドと共同体 (%)
全 国	22,083	9,869 (44.7)	889 (4.1)	11,325 (51.2)
北部地域	3,976	2,162 (54.4)	74 (2.1)	1,731 (43.5)
メキシコ 湾岸地域	3,333	989 (29.7)	126 (6.8)	2,115 (63.5)
北部太平 洋岸地域	5,331	2,933 (55.0)	22 (0.6)	2,370 (44.4)
南部太平 洋岸地域	2,640	880 (33.3)	146 (5.8)	1,608 (60.9)
中央地域	6,801	2,892 (42.5)	510 (7.7)	3,385 (49.8)

## 六 農家階層<sup>23)</sup>

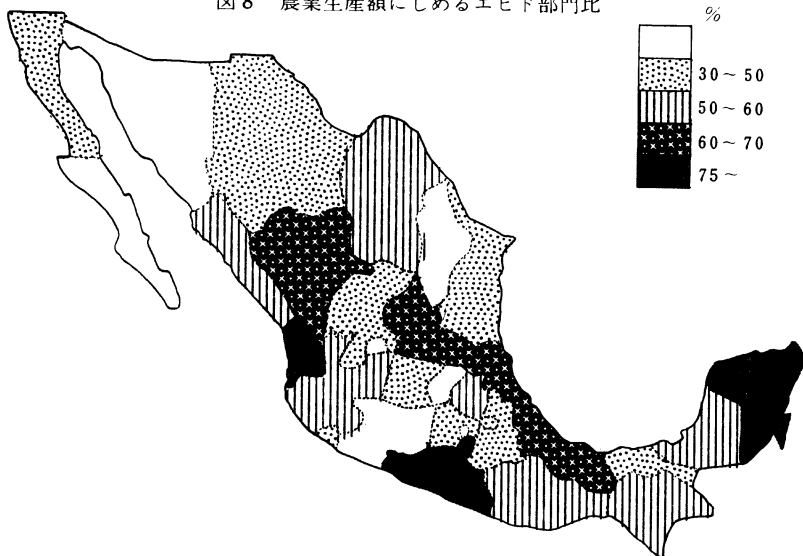
センサスでの全農業経営体は 1,020,016<sup>24)</sup>、そのうち 5 ha 以上の農場 388,392  
5 ha 以下の農場 608,932、エヒド部門 22,692 となっているが、一農場一家族  
とは限らず、エヒド部門もエヒダリオとコムネロの合計でみななければならな  
い<sup>24)</sup>。出来るだけ農家に近づく数字として生産者とその家族をとったのが表 7 で  
ある。エヒド部門は経営体数では少ないが、農家数では 70% の高い比率をしめ  
ている。一エヒド部門あたり 1635 人をかかえていることになる。個人部門で  
は 5 ha 以上と以下の生産者とその家族数はあまり変わらないので、経営体あたり  
では 5 ha 以上の農場が 186 人、5 ha 以下が 142 人となり、所有規模の大きい農  
家の方が多くなっている。地域的には南部太平洋岸地域と中央地域が、エヒド  
部門で低くなっているが、これは 5 ha 以下の零細経営が多くなるためである。  
農家階層は所有規模だけでは分らない。そこで Reyes Osorio<sup>25)</sup>らが行った階  
層区分を、価値変動は問わないで利用したのが表 8 になる。一九六〇年は S.  
Reyes Osorio のものである。

極貧農—1,000 ペソまでの農業生産額農家

貧 農—1,000 ~ 5,000 ペソ

”

図8 農業生産額にしめるエヒド部門比



小 農—5,000 ~ 2.5万ペソまでの農業生産額農家  
 中 農—2.5万 ~ 10万ペソ  
 大 農—20万ペソ以上

両年を比較すると、5 ha以上の農場の両極化とエヒド部門の圧倒的な上昇化過程が明らかにになる。これは農家数についてみたものであり、一九六〇年の資料は各階層の農家当りの生産額を出して比較しているが、一九七〇年では各階層のエヒダリオの数が分らないので示されなかった。

いずれにしても全生産額でいえば、この一〇年間の増加率は5 ha以上の農場28・1%、エヒド部門92・9%で、増加の大部分がエヒド部門になわれたのである。地域的に10万ペソ以上の生産額をあげているエヒドが、エヒド部門で7割以上を占める州を数えるとバハ・カリフォルニア、ナヤリト、シナロア、コリマ、チャパス、ベラクルス、ハリスコ、モレロである。このうちバハ・カリフォルニアとコリマを除いて全生産額ですべてエヒド部門の生産が多い。つまり近代的先進農業地域および自給的

表 7 所有別生産者とその家族 単位 1000

	全 国	5ha以上の農場(%)	5ha以下の農場(%)	エヒドと共同体 (%)
全 国	5,302.0	723.0 (13.7)	867.5 (16.3)	3,711.4 (70.0)
北部地域	758.3	162.9 (21.6)	63.3 ( 8.3)	531.6 (70.1)
メキシコ 湾岸地域	845.9	142.7 (17.0)	90.1 (10.6)	612.6 (72.4)
北部太平 洋岸地域	291.8	40.7 (14.2)	19.0 ( 6.5)	231.6 (79.3)
南部太平 洋岸地域	965.5	116.0 (12.1)	189.4 (19.6)	659.8 (68.3)
中央地域	2,438.8	259.4 (10.8)	504.0 (20.6)	1,674.3 (68.6)

性格と同時に商業的性格をもつ地域にみられる。さらに先進農業地域ではエヒドの中での階層分化がみられる。

一方、生存限界 *infrasubsistencia* の生産を行っている個人部門の 5 ha 以下の極貧農階層についてみると、以前から同部門で 7 割以上という比率を占めているのは変らないが、脱落化がみられる。また 5 ha 以上の極貧農は 4 割近くになり、所有規模での区分が意味を失おうとしている。この部門で 4 割を超える州は、チワワを除く北部地域の各州、メキシコ湾岸地域のすべての州、バハ・カリフォルニア・T、ソノラ、アグアスカリエンテス、ケレタロであり、全国に散在しているけれども、南部太平洋岸地域や中央地域に少なく、かえって先進地域の矛盾を表わしている。このような階層とすでのべた土地なき農民が、農村プロレタリアートを形成しているのである。<sup>26)</sup>

資本の増殖過程を追求するネオラティフンディオは、核心地域としてその配下の地域および周辺地域を垂直的に支配している。<sup>27)</sup> A. Warman のいう三つの地域は理論モデルであって具体的地域ではない。具体例として彼は綿花、トマト、小麦、油性植物、米、野菜の生産者だけでなく、サン・ファン川のソルゴ耕作者、ソノラ、シナロアの小麦商人、ラグーナの綿花と馬商人、カナネアの集団ソシエダーおよびチョンタルパ入植者と結びついた行財政的援助者。サブタイプとしてはメキシコ湾岸の地理的に分散しているが生産に特化した牧畜業者、

表8 農家階層 (1960) 単位1000 エヒド部門は実数

	5 ha 以上の農場		5 ha 以下の農場		エヒドと共同体	
極貧農	43	14.7	528	73.3	8,090	45.9
貧農	120	41.1	171	23.7	6,590	37.4
小農	86	29.5	21	2.9	2,510	14.2
中農	31	10.6	1	0.1	440	2.5
大農	12	4.1	0.1	—	—	—
計	292	100 %	721	100 %	17,630	100 %
(1970)						
極貧農	148	38.2	458	75.3	1,413	6.2
貧農	90	23.1	122	20.0	306	1.3
小農	96	24.8	27	4.4	1,361	6.0
中農	36	9.3	2	0.3	4,969	21.9
大農	18	5.5	0.2	—	14,643	64.6
計	388	100 %	609	100 %	22,692	100 %

カンペチエ、チャパス、タバスコの入植牧畜業者をあげている。<sup>28)</sup>  
 しかし、ネオラティフンディオを統計的に追跡することは困難である。けれども5 ha以上の大農階層がそれに近いと仮定すれば、同部門で6割を超える州は、コアウイラ、タマウリパス、バハ・カリフォルニア両州、シナロア、ソノラ、コリマといった先進農業地域および中央地域のアグアスカリエンテス、グアナファトである。

以上センサスでみてきたことから、つぎのような要約ができる。

一、天水地が多いため土地生産性の向上には灌漑が決定要因であり、また労働生産性をも条件づけている。したがって灌漑率の高い北部地方は先進農業地域となっている。

二、しかし、労働生産性を高めるには農地制度が制約条件となっており、後進地域はもちろん先進地域においても、エヒド部門が重要な意味をもってくる。

三、近代農業と自給農業の二面性、ネオラティフンディオとミニフンディオの両極化といった二重構造は、地域格差となつて反映しているが、北部すなわち先進、南部すなわち

後進という図式でなく、地域的に重層と補完関係にあると考えられる。

これらはすでに指適されていることの確認にすぎないかも知れない。しかし地域分析を通していえることは、北部地域での南北の差、メキシコ湾岸地域でのベラクルスの卓越性、北部太平洋岸地域でのシナロア、ナヤリトの相違、南部太平洋岸地域のコリマの特異性、そして中央地域の東西の差である。統計地域区分は実態に即して改めなければならない。とはいうものの地域構造にせまる手段としての地域区分を行うには、変化を跡づける資料が不足しており、ここでは州別の特性を指適するに止めておきたい。

#### あとがき

一九七〇年代後半に入ってもなおメキシコ農業部門の生産は増加せず、一人当り生産は低下しつづけている。<sup>29)</sup>

農村の過剰人口は所得拡大を求めて先進農業地域へ流出し、時には土地紛争を起している。今後も続けられるであろう資本主義農業の下では、地域格差もまた増大し続けるだろう。筆者はメキシコ農業の社会経済的發展にとってエヒド制度、特に集団エヒドが鍵になると考える。現実には崩壊過程をたどっているけれども、識者は共同経営のあり方に関心を示しているし、全国的にエヒド部門が拡大した現状では「制度的に凍りついた革命」を再び農民の手に取り戻す機会も広がっているのではなからうか。それは政治機構の整備と政策いかにかかっている。

集団エヒド発生地である先進地域のコマルカ・ラグネラについての報告は、別の機会にゆずるが、その成立要因だけあげてみると第一に乾燥地帯で灌漑が発達し土地生産力が高かった。第二に小麦、綿花のような商品生産を大企業体で行っており、規模の利益を追求せざるを得なかった。第三にペオンや農民の組合が結成され工場労



働者の支持を受けて政治的、社会的に農民組合の自覚と責任が強かった。第四に一九三〇年代の恐慌、国際労働運動の影響をうけており、カルデナス大統領のナショナリズム政策が行われていた。そして何よりも農業指導者や技術者が熱意をもっていたことが当時の資料の文脈から伝わってくる。

今日ラグーナのエヒドは細分化、多様化し、生産意欲を失ったエヒダリオが発生している。エヒダリオ以外に大量の土地なき農民がエヒド村落に居住している。経済効率と社会的平等の追求は二律背反なのかも知れない。しかし、土地は空気・水・光・太陽の熱のようにすべての人のものであるという革命の理念は、先進国の環境問題にも共通するものであり、人類の理想として追求されねばならないだろう。

資料でお世話になったアジア経済研究所石井章氏に末尾ながら御礼申し上げます。

# 注

- (1) Sánchez Molina, A.: *Síntesis geográfica de México*, Trillas, 1972, p. 175.
- (2) West, R. C. and Angelli, J. P.: *Middle America*, Prentice-Hall, Inc., 1976, p. 316.
- (3) Bonilla Sánchez, A.: Un problema que se agrava, la subocupación rural, Stavenhagen, R. y otros: *Neolatifundismo y explotación*, Editorial nuestro tiempo, 1971, p. 147.
- (4) Fernández y Fernández, R.: Clasificación de la agricultura por tipos, *Revista del México agrario*, año V III, num. 1, 1975, p. 59.
- (5) ここでは結果だけ示されており原資料は未見。
- (6) *ibid.*, p. 59.
- (7) *ibid.*, pp. 61 ~ 63.
- (8) Reyes Osorio, S. y otros: *Estructura agraria y desarrollo agrícola en México*, Fondo de cultura

- económica, 1974, pp. 197~201.
- 石井章 メキシコ農業構造と農業発展「アジア経済」Vol. 17, No. 9, 1976, pp. 90~100.
- (8) 栗原尚子 ラテン・アメリカの大都市における低所得階層の研究について「経済地理学年報」Vol. 24, No. 1, 1978, pp. 1~18.
- (9) Wellhausen, E.: The Agriculture of Mexico, *Scientific American*, 1976, p. 130.
- 石井章 メキシコの農業問題と農業政策「農業構造問題研究」No. 115, 1978, pp. 43~44に紹介。
- (10) 使用したセンサス。
- Secretaría de Industria y Comercio: V *Censos agrícola - ganadero y ejidal*, 1970 (*Encuesta especial sobre rendimientos y precios medios*, 1972, *Datos básicos*, 1973, *Directorio de ejidos y de comunidades agrarias*, 1973. *Resumen general*, 1975), IX *Censos general de población*, 1970, *Resumen general*, 1972. 基本データと総括篇では数値が一致しないが各節では扱う方をとった。
- (11) Reyes Osorio, S., op. cit., p. 178, II—18表
- 湯川根子 メキシコの農業開発と貧困問題「アジア経済」Vol. 17, No. 8, 1976, pp. 22~23.
- (12) Reyes Osorio, S., op. cit., p. 110.
- (13) *ibid.*, p. 111.
- (14) Wellhausen, E., op. cit., p. 129.
- (15) Tamayo, J. L.: *El problema fundamental de la agricultura Mexicana*, Instituto Mexicano de Investigaciones Económicas, 1964, p. 72.
- (16) 湯川根子 農業開発のための技術援助「経済経営論叢」Vol. 12, No. 4, 1978, p. 109.
- (17) Slavenhagen, R. y otros, op. cit., p. 29, 「九〇年までの展望」なお農業人口推計は S. Reyes Osorio の推定をかなり下廻した。
- (18) Guzmán Ferrer, M. L.: Crecimiento agropecuario comparativo de las entidades federativas del país (1940~1970), *Revista del México agrario*, Año VIII, Num. 1, 1975, pp. 111~152.
- (19) 石井章 メキシコのエポードの現状と問題点「斉藤仁・滝川勉編『アジアの農業協同組合』アジア経済研究所

- 1973, pp. 489~527.
- 同 メキシコの集団ソシエター、小倉武一編著『日本と世界の農業共同経営』御茶の水書房、1975, pp. 151~163.
- Gutelman, M.: *Capitalismo y reforma agraria en México*, Ediciones Era, 1974, pp. 151~156.
- おおよそメキシコ農業を扱った資料は S. Reyes Osorio の大者を含めて革命の産物であるエヒドを避けて通れないのである。
- (20) 拙稿：メキシコの共同体的土地所有について、「人文地理」Vol. 22, No. 1, pp. 76~77. 分布図については West, R. C., op. cit., p. 313. その他 Cumberland, C. C.: *México, the struggle for modernity*, Oxford Univ. Press, 1968, pp. 12~13. も作成しているもので一九六〇年との比較がよい。
- (21) Stavenhagen, R.: Reforma agraria y alternativas institucionales en la agricultura, *Revista del México agrario*, Año VII, Num. 2, 1975, p. 19.
- (22) *ibid.*, p. 21.
- (23) 一九六〇年では predios, 一九七〇年では unidades を使用しているのをこれまで農場と訳してきた。農場または経営体と訳するのが正しいだろうが、日本語として使い慣れている農家とする。
- (24) エヒドと共同体の数値は Comentario y Resumen で異なっている。これは後者のものである。
- (25) Reyes Osorio, S., op. cit., p. 1030, III—14 表参照。大農、小農の訳は石井章：メキシコの農業問題と農業政策、p. 41 参照。
- (26) Stavenhagen, R.: Aspectos sociales de la estructura agraria en México, *Neolatifundismo y explotación*, Editorial nuestro tiempo, 1971, p. 55. 但し彼はエヒダタリオン・ユニオン・ティスタ、土地なき農民の二つの階層に分ちよう。
- (27) Warman, A.: Sociedad campesina y reforma agraria, *Revista del México agrario*, Año IV, Num. 3, 1971, pp. 73~83.
- (28) Warman, A.: *Los campesinos, hijos predilectos del régimen*, Editorial nuestro tiempo, 1975, pp. 43~66. 支配権力に愛される子供達という言葉は「日本の農民と比較して皮肉なタイトルというべき」。Warman については石井章：メキシコ農業の当面する若干の問題、「アジア経済」Voe. 18, No. 11, 1977, pp. 107~108 に紹介。

8 *Comercio exterior*, Vol. 28, Num. 6, 1978, p. 715 2423 1964~66 穀類作物収量関係で・ 8 1974~76 谷収増進・ 88°

### The Regional Character of Mexican Agriculture

Myai Takashi

1. Mexican agriculture is classified into modern agriculture, traditional agriculture and subsistence agriculture in a production method. Among these classifications we can point out that the feature of Mexican agriculture is a marginal production under subsistence agriculture. But we have got to add that it is difficult to get hold of its situation precisely in the limited condition of available data.

2. The agricultural production of Mexico has rapidly developed for these thirty years. And its development has supported the economic growth of Mexico. But, on the other hand, the agriculture which has developed for these ten years faces a new contradiction. For the following dual structure has come to the front; the dual structure between *neofundio* and *minifundio*, the large-scale management upon which they gathered land and capital and the farmers who live on the extreme margin of survival, a commercial agriculture and a traditional agriculture. Especially the appearance of a large number of landless farmers brings poverty into the country and causes a gravitation of the population toward big cities. Furthermore it forces the government to focus upon the settlement of an employment issue.

3. Regionally saying, the Northern region and the North pacific region are developed regions, in which modern agriculture has been put into practice. On the contrary, the Southern region and the Central region are underdeveloped regions, in which a traditional agriculture is done. In developed Northern region large-scale irrigation projects have been put into practice through a public investment. So we have got to say that its contradiction has come to the front more bitterly in a developed region of a high production level.